

著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は発表 の年月	発行所、発表雑誌 等又は発表学会等 の名称	概 要
1 (学術論文) Curr Pharm Des Vol.12, No. 4 pp.429-442 《筆頭論文》	共著	2006年2月	Bentham Science Publishers	Na チャネルに選択的に結合する毒や薬物を中心にその機能と Na チャネル蛋白への結合に関する情報を網羅したレビュー。Na チャネルの機能探索ツールとしてのリガンドの役割の重要性が示唆されている。(14頁) (山岡薫、Vogel SM、瀬山一正) 担当部分：共同研究につき本人担当部分抽出不可能。
2 (学術論文) Pathobiology Vol.73, pp. 288-294	共著	2006年11月	Karger AG	筋の発達の様子を筋由来の培養細胞 L6 について行った。その結果電気刺激を加えることが筋への分化を促進し、各種筋特有の蛋白の発現と同時に、電気的活動を行うためのイオンチャネル、ギャップ結合チャネルの機能の発達や自動収縮能力を獲得することがわかった。 (河原裕美、山岡薫、岩田全広、藤村昌彦、梶梅輝之、籬拓郎、武田正明、井出俊憲、片岡勝子、浅島誠、弓削類) 担当部分：共同研究につき本人担当部分抽出不可能。
3 (学術論文) Toxicon Vol. 51, No. 3, pp381-387	共著	2008年3月	The International Society on Toxinology	フグ骨格筋 Na チャネルの TTX 耐性について2カ所のアミノ酸が関係している。それらのアミノ酸の機能について電気生理学的に検討した。そのうち 383 番目のフェニルアラニンがアスパルギンに変異することで 3000 倍の TTX 感受性が低下することがわかった。1569 番目のグリシンからスレオニンへの変異はさらに2~3倍感受性の低下を示した。この感受性の低下は主に TTX が結合する速度が低下することが原因であった。 (丸太 聡, 山岡 薫, 山下 まり) 担当部分：共同研究につき本人担当部分抽出不可能。
4 (学術論文) J Biol Chem Vol 284, No. 12, P7597-605 《筆頭論文》	共著	2009年3月	American Society for Biochemistry and Molecular Biology	電位依存性 Na チャネルに特異的に結合し、その機能を多様に修飾するシガトキシンが感覚神経に特異的に発現する Na チャネルのうち Nav1.8 分子を選択的に大きく影響を与えることがわかった。その責任部位は4つの膜貫通ドメインのうち、最初の二つに局在することがわかった。 (Yamaoka, K. Inoue, M. Miyazaki, K. Hirama, M. Kondo, C. Kinoshita, E. Miyoshi, H. Seyama, I) 担当部分：共同研究につき本人担当部分抽出不可能。
5 (学術論文) Am J Physiol Regul Integr Comp Physiol Vol. 298, No. 4, pp1117-24	共著	2010年4月	the American Physiological Society	ラットの子宮筋に細胞外ATPを投与することで電流が増大する。その ATP 感受性電流の担体が P2X7 受容体であることをその選択的ブロッカーやイオン透過性から示した。(Miyoshi, H. Yamaoka, K. Urabe, S. Kodama, M. Kudo, Y.) 担当部分：共同研究につき本人担当部分抽出不可能。